平成16年度　第2回養成講習会（理論）
2003年11月2日　　小林　弘明

スキー指導活動の構成ついて

1．インストラクションサービスの位置づけと役割

世界の三大マーケットのひとつに考えられるほどの「産業構造」を維持するところまで発展してきた。
そして構成する産業分野業種は、

①場と施設を提供する業種　（スキー場）
②用品・用具を提供する業種　（スポーツ店）
③サービスを提供する業種　（スキー学校）

スキーをするマーケットがカズから質を求める方向に変わってきた

私たちスキー指導者は③サービスを提供する業種に分野に区別され、顧客との接点に立つことで「顧客満足」の充実が一時的、「顧客創造」の充実が二時的目標である。

これらの役割を果たす上で指導者が身につけなければならない「技術」とは

①マネージメント技術　←P.134
②人間関係技術　←P.134
③指導技術

サービス分野は技術指導中心より学習指導を主体においてほしいということです。
↳楽しさを味わうのに技術習得が必ずしも前提にならないという指導

2.よいスキー学習の構造

1.[スキー学習の基本的な考え方は！]
「楽しさ」を体得し、自発的・主体的能力を高めることで「生涯にわたって継続的にスキーに参加するスキーヤーを育てる」

2.[スキー指導のあり方]
指導者には与える指導よりも、学習の意欲を引き出したり、学ぶもの自身に問題を解決していく能力を身に付けさせるよう手助けする姿勢がのぞまれる。よって学習を「支援する」姿勢が大切です。

3.スキー指導の内容
①現在よりも「うまくなる」という技術の学習

②ルールやマナーを守って「仲間と協力して活動できる」という人間関係の問題を解決する学習

以上2点は「スキーが好きになるように肯定的に働きかけるような技術指導と社会的行動に対する指導。

スキー学習の構造には2つある。

「基礎的条件」→学習を効果的に円滑に進めるための条件
（学習態度；人間関係自然条件）

「内容的条件」→学習を進める上での計画と実施の中心となる条件
（目標・教材・内容・方法）

よって2つの条件が整っていることで「良いスキー指導・学習」が成り立つ。

3.良いスキー学習を実現するため基礎的条件

①滑る時間が十分に確保されているか？（マネジメント技術）

マネジメントに要する時間を努力を少なくし、学習者滑る時間を十分に確保することが大切です。学習者にとって「精一杯滑ることができた」という活動欲求の充足こそ高い評価の第一にあげられる基準です。
ではマネジメントに要する時間を努めて少なくするにはどうしたらよいか？以下のように挙げられる。

ⅰ.指導にあたって必要な学習者の個人的条件の把握

ⅱ.服装や用具の点検（集合時や準備運動中に注意を払う。[観察し点検する]）

ⅲ.ポール（器具）は前もって設定斜面に搬送し準備しておく

ⅳ.学習斜面の選定はそのスキー場の斜面状況、リフトの配置などを熟知する

②自主的に学ぶ姿勢ができているか？

積極的に学ぼうとする意欲の喚起や学習にあたっての約束事、学習活動における行動手順について予測される事柄については予め理解を深めさせておき、自主的に活動できるようマネジメントしておくことが大切だ。
学習者自身が理解し積極的に約束事にしたがった行動をするように仕向けないと効果的ではない。

③人間関係技術

指導者は学習者から信頼される人間関係を作る。

④学習者の相互作用

講習会の雰囲気を良くする上で情緒的開放（気楽さ・意識の高揚）学習者同士の助言・励まし・補助が生まれるよう配慮する。

⑤自然に対する意識

山の気象・植物・動物の生態など、学習者に説明することができるよう自然への関心を高めておく。

4-1.良いスキー学習の為の内容的条件（計画段階での指導者の役割）（情報収集）

①学習者一人一人の個性を把握する。

ⅰ.目的意識　→　動機・ニーズ・目標

ⅱ.体力要因　→　年齢・体力レベル・運動能力

ⅲ.運動歴　　→　運動経験・スキー歴・スキー技能程度

ⅳ.対人関係　→　　学習グループの交友関係・同行の仲間（家族・友人）

ⅳ.装備用品　→　服装・スキー用具

②学習目標・課題を明確に設定する。

③学習内容を適切に選択・設定する。

学習者が成功したときの違和感・満足感はさらに要求水準を高め、より難しい課題に挑戦しようとする積極的な意欲を起こす。技能レベルに応じた成功体験が得られる課題を設定することが必要。
スパイラル型学習過程　→　技術課題が未完成でも新しい課題への挑戦を認め、また前の学習に戻ることも可能にした学習の進め方

④有効な学習指導過程を設定する。「何を」「どのように」「どんな順序で」というふうに。

練習方法例）　運動・動作の不安定な未熟練者を安定して滑り降りることのできる段階へと指導する場合には、無理のない距離を努めて長く滑らせることで「できた」経験によって、技術課題が具体的に「わかる」ようになる。

⑤学習形態を計画する。

ⅰ.グループを構成する人数　→　七～十人くらい

ⅱ.グループ編成　→　技能別グループは学習の計画がとりやすい。
志向別グループは個人的諸条件の配慮が大切。

⑥評価方法の計画と資料の準備を行う。

4-2.学習活動の展開における指導者の役割（指導技術）～テクニック指導の上で～

①学習環境や条件を整備する。

→ 心理的恐怖心を起こさせず、学習課題に適合した斜面を選択、整備する。

②学習方法の形式を選択する。

初級 → 共通点が多く一斉学習が中心
↓
技能水準が高くなればなるほど → 個別学習が中心になる

③学習の「目当て」や「学習方法」を理解させる。

目当ては → 「どんな運動経過」を目指し、「どのように運動動作」をするか、学習者が明確に理解できる具体的な要点を提示する。

学習方法 ；

ⅰ．師範による方法

ⅱ．言葉による方法

ⅲ．視覚機器による方法

④運動の出来栄えに有効なフィードバックを与える

フィードバック → 運動中や運動終了後に自分自身の目や筋の感覚で目的とする運動のイメージと、結果として現れた運動とを比較してその違いを知覚し、意識的に修正しようとして運動を繰り返し学習すること。

⑤現在進行中の学習活動を、どこでやめ、次の課題に以降するか的確な判断が必要。
飽きが来ていて活動意欲を失っていないか？

⑥常に良好な人間関係が保てているか。

⑦学習相互の良い関係

⑧全体や集団への係わり合いだけでなく、個々の学習者への係わり合いを多くする。
能力の低い学習者にほど、細心の注意を持って肯定的な係わり合いを持ち指導する。

⑨努めて長い距離の滑走の中で学習させる。

～～～指導後の役割～～～

指導者は指導後、自己の指導を点検する自己点検、自己反省の姿勢が必要。

5.スキー指導の計画

指導計画の必要性
→ いきあたりばったりの指導では、学習成果は期待できず、学習や指導の改善の為の反省、評価も適切に行うことができません。

指導計画にあたって
→ 長期的な見通しの中で計画を立案する必要がある。
クラブ、ジュニア →成人期まで

指導計画・立案の実際

ⅰ.全体計画（クラブ）

ⅱ.単元計画（短期間で実施されるスキー教室）

ⅲ.指導案（日案）（一日だけのスキー学校）

6.スキー指導における評価とその活用

診断的評価	形成的評価	総括的評価	
↓	↓	↓	の三つがある。
指導前	指導中	指導後	

絶対評価	相対評価	個人内評価	
↓	↓	↓	の三つがある。
目標達成の有無	成績分析	過去の時点での成績水準	